

日本統治時代最初の紅頭嶼調査で 撮影された写真について

足立 崇[†]

On the Photographs Taken During the First Investigation of Kotosho in Japan
Rule Age

ADACHI Takashi[†]

Abstract

In March 1897, the first Investigation of Kotosho (Lanyu) was conducted by the Government-General of Taiwan. It is known that various investigations were conducted on the life of the Yami people and the environment of the island. However, it is not well known that many photographs were taken by investigators. This paper clarifies the photographer and the content of the photographs through the photographs taken in the investigation. As a result, it was revealed that Arita Shunko had photographed the scenery of each area, the scenery of the settlement, houses, Yami people, researchers, specimens, and so on.

Key Words: Yami, Arita Shunko, Ino Kanori, Photograph, Taiwan

キーワード：ヤミ、有田春香、伊能嘉矩、写真、台湾

[†] 大阪産業大学 デザイン工学部 建築・環境デザイン学科 准教授

草稿提出日 10月22日

最終原稿提出日 12月8日

1. 序

1897年10月から12月にかけて、鳥居龍蔵が台湾の紅頭嶼（蘭嶼）でヤミとよばれる人々の人類学的調査を行い、写真撮影したことはよく知られている。鳥居の紅頭嶼調査写真は、『東京大学総合研究資料館所蔵鳥居龍蔵博士撮影写真資料カタログ』（1990）¹の中にまとめられているが、近年、皆川隆一によってその内容の詳細について解明が進められている²。また、范如菀によって鳥居龍蔵写真の民族学的研究における意義に関する研究も行われている³。鳥居龍蔵の調査写真の分析が進む一方で、それ以前の1897年3月に総督府による最初の紅頭嶼調査が行われ、写真撮影がされたこと、その内大小90枚の写真が拓殖相への報告文書として送られていたことが近年明らかになっている。これは3月調査に参加した民政局技師萱場三郎の復命書に関する出岡学の解説文による。出岡によれば、「萱場の報告書は、佐野友三郎事務官と成田安輝技師の復命書や大小90枚の写真と合わせて、拓殖相への報告案件として、乃木総督や水野民政局長への決済を受けるために4月26日に文書課に送られ、翌27日に総督以下の決済を経て28日に拓殖務省に送られていた」⁴という。しかし、これまで3月調査で撮影された写真が具体的にどのようなものであったかは、明らかにされてこなかった。本稿は、3月調査時に撮影された写真とそれにかかわる資料を示し、それらが誰によって撮影されたもので、その内容が具体的にどのようなものであったかを明らかにするものである。これは当時のヤミの生活環境の実態を明らかにする上で意味があるとともに、日本統治時代初期の日本人とヤミの人々との交流を明らかにする上でも意味があると考え。なお、本稿では資料対応関係の便宜上、地名などについて当時のまま記述する。たとえば、「蘭嶼」については「紅頭嶼」、「緑島」については「火烧島」とする。また、「蕃」など現代では不適切な表現も見られるが、当時の資料の引用としてやむを得ず使用することがあることを、あらかじめことわっておきたい。

1897年3月の紅頭嶼調査は、3月15～19日にかけて行われている。参加したのは菊池主殿（歩兵少佐）、奥本徳太郎（歩兵中尉）、中村緑野（三等軍医）、佐野友三郎（民政局事務官）、成田安輝（技師）、矢代由徳（海軍大尉）、萱場三郎（技手）関口長之（陸軍通訳）、寺田勝士（台

¹ 鳥居龍蔵写真資料研究会、『東京大学総合研究資料館所蔵鳥居龍蔵博士撮影写真資料カタログ』[第2部]（東京大学総合研究資料館標本資料報告19，1990）

² 皆川隆一，「鳥居龍蔵撮影＜海辺の景＞の疑問 紅頭嶼古写真調査ノート（1）」、『台湾原住民研究』14（2010）：37-56

皆川隆一，「鳥居龍蔵撮影＜七つの釘＞の疑問 紅頭嶼古写真調査ノート（2）」、『台湾原住民研究』16（2012）：32-52

³ 范如菀，「鳥居龍蔵の記録した台湾 — 民族学における初期乾板写真の重要性を中心に —」、『鳥居龍蔵研究』創刊号（2011）：173-182

范如菀，「写真原板保存の重要性に関する考察：鳥居龍蔵の撮影した台湾の乾板写真を中心として」、『台湾原住民研究』15（2011）：126-141

⁴ 中京大学社会科学研究所台湾史料研究会，『日本領有初期の台湾 — 台湾総督府文書が語る原像 —』（創泉堂出版，2006）：531

湾新報記者) など、軍務局陸軍部7名、軍務局海軍部4名、民政局19名、便乗者14名、軍隊16名をはじめとする合計113名である⁵。行程は、3月11日基隆から福井丸に乗船し、紅頭嶼方面へ向かって出発、12日火燒島(現:緑島)に到着、同島調査、14日同島出発、15日紅頭嶼に到着、同島調査、19日同島出発、20日基隆に帰着というものである。調査内容は、領有の諭告、国旗授与、島内状況調査、目算測図(1/20000)など多岐にわたる。具体的な調査結果については、『台湾総督府公文類纂』に復命書が残されており、台湾文献館に整理保管されている。中京大学社会科学研究所台湾史料研究会による『日本領有初期の台湾－台湾総督府文書が語る原像－』(2006)にはそれらの復命書が活字化され、解説もされている⁶。

ここではまず、3月調査で実際に写真撮影を行った人物について明らかにしたい。

2. 写真を撮影した3人の人物

『台湾新報』1897年3月31日付の記事に、次のような文がある。

紅頭嶼探検隊の一行中総督府民政局にて特に有田某を雇ひ入れて随行せしめ火燒島、紅頭嶼の二島中能く文筆の尽くす能はざるあらゆる風俗、景色は図解を以て補綴報告するの目的にて撮影したる⁷(下線筆者)

これにより、有田という人物が風俗や景色を調査撮影するため民政局によって雇用されていたことが分かる。民政局に雇われたわけであるから、民政局員による拓殖務省への復命書に添付された大小90枚の写真は、この有田によって撮影されたものと考えられる。『台湾新報』には、3月調査に派遣された記者寺田勝士によって、「紅頭嶼探検記」という記事が連載されている。その中で調査隊一行と同行する有田の姿が度々描かれている。この有田という人物は、写真師として台北の北門街で写真店を営んでいた有田春香のことである⁸。1899年8月発行の『台湾名所写真帖』⁹には有田春香の広告が掲載されている。そこには「写真 台北々門街一丁目 写真

⁵ 台湾総督府陸軍幕僚編著、『台湾総督府陸軍幕僚歴史草案 西元1895至1905年』(上)(捷幼出版社, 1991): 475-476

⁶ 中京大学社会科学研究所台湾史料研究会、『日本領有初期の台湾－台湾総督府文書が語る原像－』(創泉堂出版, 2006)

⁷ 「写真頒布再記」,『台湾新報』(1897年3月31日)

⁸ 『台湾新報』の「現場の撮影」(1899年1月25日)という記事には「春香」に「しゅんか」とルビがふられているが、同紙記事「一丸館と新松金」(1903年9月11日)には「しゅんこう」、「台北の『会』(五) 東京人会」(1909年3月24日)には「しゅんかう」とルビがふられている。本稿では、「しゅんこう」としておく。また、「東京人会」の記事に「高橋親義大庭永成有田春香伊藤政重氏等外生粋の江戸兒十数氏発起し」とあり、有田が東京出身であることが分かる。

⁹ 石川源一郎、『台湾名所写真帖』(台湾商報社, 1899)

師 有田春香」とある。また、伊能嘉矩所蔵の写真が伊能家から寄託され遠野市立博物館に保管されているが、その中の「北白川宮征討記念碑」を写した写真台紙の裏面には「台湾城内北門街一丁目五番地 有田春香」と印刷されている。さらに、1903年11月8日付の『台湾民報』にも広告が載っているが、そこには「台北北門街三丁目 写真師 有田春香」¹⁰とある。ちなみに、1897年2月4日付『台湾新報』の「市中種々 写真店」という記事には「今台北惠良中島を初め写真店合計六戸あり」¹¹とあり、3月調査当時台北に6戸の写真店があったことが分かる。

3月調査の後、参加した人々は「紅頭嶼探險紀念会」という会を開催し、親睦を深めている。1898年12月25日付『台湾新報』には「第三回紅頭嶼探險紀念会」と題する次の記事が掲載されているが、ここにも有田の名前が見える。

関口長之氏の送別を兼ねたる同会は既記の如く一昨二十三日午後五時より府後の吾妻に於て開かれしが会するもの関口長之、近藤久次郎、的場喜忠、田中守信、藤本賢次郎、有田春香、長濱実等の諸氏及び米国領事デビットソン氏、陸軍幕僚付黄成裳氏等総て十余名にして酒間探險当時の奇談百出し献酬歛を罄して退散せしは午後九時前なりしと云ふ同会第一回は会するもの五十に余りたるに今回は其の三分一に達せざりしは当時の人々多くは他に転任し又は死亡したるに依れりと而して同第四回は来春早々デビットソン氏の邸に開くべきことに決定せりとぞ¹²（下線筆者）

上の記事中に、日本人にまじって1人のアメリカ人の名前が載っている。この人物は、当時ニューヨークヘラルドなどの通信員として3月調査に参加したジェームズ・W・デビッドソン（James W. Davidson, 1872-1933）である。国史館台湾文献館に所蔵されている『台湾総督府公文類纂』に「紅頭嶼蕃人ノ状況ダヒドソン氏報告書」¹³という報告書がある。これはデビッドソンによる3月調査の報告書である。“The origin of the Savages of Botel Tobago Xima”というタイトルの英文報告書に日本語翻訳を添付したもので、内容は、ヤミの人々がどのような人種に属するかを、皮膚の色や頭髮、容貌、体型、言語、船などから論じたものである。報告書には4枚の写真が貼り付けられている。内1枚が台湾本島先住民の写真、3枚が紅頭嶼ヤミの写真である紅頭嶼の写真2枚に関しては“These two pictures were taken by me at Botel Tobago”と明記されており、デビッドソン自身が撮影したものと分かる。3月調査では、有

¹⁰『台湾民報』（1903年11月8日）

¹¹「市中種々 写真店」『台湾新報』（1897年2月4日）

¹²「第三回紅頭嶼探險紀念会」、『台湾新報』（1898年12月25日）

¹³「紅頭嶼蕃人ノ状況ダヒドソン氏報告書」、『台湾総督府公文類纂』（台湾総督府公文類纂4533冊22号 1897-05）

田のほかにデビッドソンもまた、写真撮影していたのである。デビッドソンの経歴については陳俊宏の『禮密臣細説台灣民主國』（2003）¹⁴に詳しく記されている。それによれば、デビッドソンは1872年、アメリカミネソタ州の生まれで、1892年にジャーナリストで詩人のエドウィン・アーノルドの講演旅行に事務経理として随行し、その後ジャーナリストで探検家のヘンリー・スタンレーに経理として随行している。1893年には北極探検隊に加わりグリーンランドを探検している。そして、1895年にアメリカの新聞社数社の戦地記者として台湾に赴き、台湾の側にあつて日本との戦況を伝え、同年6月日本軍が台北城に迅速に入城できるようはからい、その後日本軍に随行しながら記事を発信している。デビッドソンがどういう経緯で紅頭嶼調査に参加することになったかは不明である。調査後、デビッドソンは1898年11月から1904年1月まで日本統治時代台湾の初代淡水駐在米国領事となり、1903年には台湾の歴史についてまとめた大著*THE ISLAND OF FORMOSA, PAST AND PRESENT* (1903)¹⁵を著している。この本には、紅頭嶼の写真が5枚掲載されているが、内2枚は先の報告書にあった写真と同じものである。

3月調査について記した『台湾新報』の記事には、次のような文がある。

村内の幼婦女子は一行の入村を聞知し既に山中に逃れて一人として出で来るものなし佐野君曰く老幼婦女子の風俗を見んと欲せしに今斯の如し井原君亦落胆やる方なき面相にて謂へらく我れ亦婦女子の風俗を撮影せんと欲すること久し今日之れを写さざれば亦時期を得難しとて相見て哄然¹⁶（下線筆者）

この記述から有田、デビッドソンのほかに井原という人物も写真撮影していたことが分かる。しかし、井原がどのような肩書きで調査に参加し、どのような目的で写真撮影を行ったのか、その詳細については不明である。別の記事には井原に関する次の記述がある。

営を村落なる島人の居宅に移すこととなり指揮官、軍医、関口通訳デビット君其他の諸士と共に降雨を冒して舎営に入る此夜一行は全島探検の目的を遂げ終りたるを祝しデビット君は嘗て南洋探検中に得たる歴事を本島に引援し井原君の通訳に依て談話しけるなどは大に余等をして探險上の参考たらしめたり¹⁷

¹⁴ 陳俊宏、『禮密臣細説 台灣民主國』（南天書局，2003）本書ではデビッドソンの紅頭嶼調査が1896年とされているが、1897年の誤りであろう。

¹⁵ Davidson, James W., *THE ISLAND OF FORMOSA, PAST AND PRESENT* (Macmillan, London and Kelly & Walsh, Yokohama, 1903/南天書局復刻版, 1992)

¹⁶ 「紅頭嶼探險記」, 『台湾新報』（1897年4月14日）

¹⁷ 「紅頭嶼探險記」, 『台湾新報』（1897年4月18日）

ここでは井原がデビッドソンの通訳をしている。井原はデビッドソンのための通訳であった可能性もある。井原が撮影した写真は、これまでのところ発見されていない。

以上のように、3月調査で写真撮影をしていた人物として特定できるのは、有田春香（写真師）、ジェームズ・W・デビッドソン（ニューヨークヘラルド等の通信員）、井原（職業不詳）の3人である。この中で、総督府調査における写真撮影で主たる役割を果たしていたのは、民政局に写真師として雇われていた有田春香であったと考えられる。次に有田が撮影した写真がどのようなものであったかを、当時の資料をとおして明らかにしたい。

3. 陸軍省への説明書と海軍省への報告書

3月調査の行程については、『台湾新報』に25回にわたって連載された寺田勝士の「紅頭嶼探検記」に詳しく描かれている。寺田は『台湾新報』特派員として、佐野友三郎率いる民政局の調査本隊に同行している。有田もこれに同行していたため、先述のように寺田によって有田の姿が度々描かれている。ここではまず、『台湾新報』の記事をとおして調査本隊の調査行程について明らかにしておきたい。なお、3月調査は、言語の通じないなか5日間の短期調査であったため、ヤミの地名を調べることができず、便宜上集落名などは調査員たちの名前などを用いた名称がつけられている。当時の資料にもそうした名称が用いられているため、本稿では資料対応関係上それらを使って表記することがあるが、その後ろにできるだけ括弧してヤミの集落名を記す（図1）。

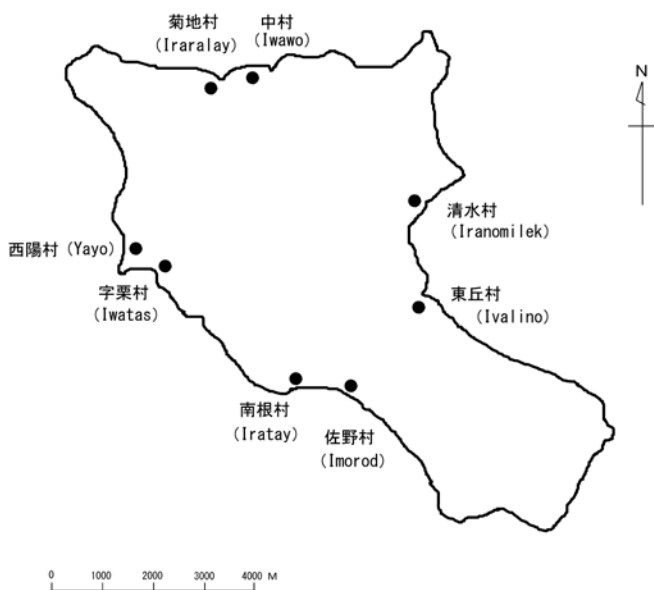


図1 紅頭嶼地図

（集落名は1897年3月調査で日本人がつけたもの、括弧内はヤミの集落名）

3月15日

午前9時から菊地村 (Iraralay) に上陸を始める。菊地村 (Iraralay) の海岸に幕営を建設し宿泊。

3月16日

午前7時、菊地村 (Iraralay) にて領有告示・諭告、贈与品頒布。午前9時、菊地村 (Iraralay) を発ち、東海岸に沿い中村 (Iwawo) に至り、視察を早々に終えて発ち、清涼湾で小憩して発つ。緑樹の陰で30分小憩して発つ。見返坂を経て清水村 (Iranomilek) に至り、午後1時20分昼食。清水村 (Iranomilek) にて領有告示・諭告、贈与品頒布。午後2時30分、清水村 (Iranomilek) を発ち東丘村 (Ivalino) に至り領有告示・諭告、贈与品頒布。午後5時10分同一の道で帰途に就き、午後8時、菊地村 (Iraralay) に帰着し宿泊。

3月17日

午前8時、菊地村 (Iraralay) を発ち、西海岸に沿い進む。途中、大洞の中で30分小憩して発ち、向西角を経て海岸で1時間休憩し発つ。午前11時、西陽村 (Yayo) に至り、村西端の椰子林に露營して昼食をとる。領有告示・諭告、贈与品頒布。午後1時、西陽村 (Yayo) を発ち、途中海岸の岩陰で小憩し再び発つ。午後3時、南根村 (Iratay) に至り、領有告示・諭告、贈与品頒布。午後4時、南根村 (Iratay) を発ち、佐野村 (Imorod) に至り、領有告示・諭告、贈与品頒布。佐野村 (Imorod) に宿泊。

3月18日

午後7時、佐野村 (Imorod) を発ち、途中奥本峠で1時間小憩して発つ。東丘村 (Ivalino) に至り、さらに清水村 (Iranomilek) に至り、船小屋で雨宿りし昼食。午後0時前、清水村 (Iranomilek) を発つ。中村 (Iwawo) を経て午後3時、菊地村 (Iraralay) に帰着。午後5時、小溪が溢れたため幕営を撤収し菊地村 (Iraralay) の村内に宿泊。

3月19日

午前10時乗船し、午前11時30分紅頭嶼を発つ。

3月調査後、大小90枚の写真が拓殖相への報告文書に添付し送られていたことは先に述べたが、拓殖相へ送られた写真は今のところ見つかっていない。しかし、こうした報告文書や写真は拓殖相だけでなく、陸軍省にも送られていた。現在、防衛省防衛研究所に所蔵されている「紅

頭列島写真及説明書の進達及別紙説明書」(1897)¹⁸がそれである（以下「説明書」と記す）。説明書には次の文書が添付されている。

先般差出シ置候報告書目録ニ記載シアル紅頭列島写真及ヒ説明書出来候ニ付進達候也

明治三十年六月二十四日

台湾総督府

陸軍省

御中

この説明書が、台湾総督府から陸軍省に写真とともに送られたものであることが分かる。残念ながら添付されていたはずの写真は防衛省防衛研究所に所蔵されておらず、いまだ発見されていない。説明書の説明は写真99枚に関するものである。99枚の内、26枚が火烧島、73枚が紅頭嶼に関するもので、「第一」から「第九十九」まで番号が付けられており、紅頭嶼に関するものは「第二十七」から「第九十九」までである。台湾総督府から陸軍省に送付されたものであることとその写真枚数から、これらは有田が撮影した写真と考えてよいであろう。少し長い引用となるが、紅頭嶼にかかわる部分を以下に記す。

○紅頭嶼

第二十七 紅頭嶼全景

同嶼ノ北岸ヲ距ル三里ノ海上ニテ撮影

第二十八 蕃舟

第二十九 蕃舟、小屋

第三十 紅頭嶼東海岸字関口（新命名）附近ヨリ観音岩ヲ望ム

第三十一 紅頭嶼北岸巡回中珊瑚礁上休憩ノ景

第三十二 清水村（新命名）海岸ノ景

第三十三 関口附近ヨリ獅子角（新命名）ヲ望ム

第三十四 清水村撫蕃品分配ノ景

第三十五 全二

¹⁸「紅頭列島写真及説明書の進達及別紙説明書」、『明治30年分 編冊 2 付属 台湾総府 混成旅団』（陸軍省大日記 陸軍省雑、1897年6月24日～12月24日、防衛省防衛研究所所蔵）

なお、この文書は国立公文書館アジア歴史資料センターによって画像でも公開されているが、本稿では防衛省防衛研究所に保管されている原本を参照した。

「紅頭列島写真及説明書の進達及別紙説明書」（防衛省防衛研究所）陸軍省-雑-M30-4-92 明治30年6月24日～明治30年12月24日JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C 10061180900

- 第三十六 紅頭嶼ノ東北清涼湾（新命名）海岸ニ於ケル「パンダムス」ノ一大樹林
- 第三十七 東丘村（新命名）ニテ撫蕃品分配後ノ景
- 第三十八 仝村蕃人家屋ノ景
- 第三十九 仝村ノ全景遠望
- 第四十 紅頭嶼北海岸ノ一大空洞
日光直射百五十度一行暑不堪此空洞ニ入リテ休憩シ僅ニ蘇生ノ思ヒヲ為セリ
- 第四十一 仝二
- 第四十二 向西角（新命名）ヲ踰ヘテ一行珊瑚礁上ニ休憩ス
- 第四十三 探見隊一行向西角ヲ踰ユル景
向西角ハ紅頭嶼中一絶險ノ地ニシテ断崖千尺天空ニ聳ヘ数仞ノ下ハ怒濤岸ヲ嚙テ
鞞々トシテ声アリ絶壁ノ間纔ニ寸余ノ細径ヲ存シ細径存セサルノ処則チ匍伏シテ
珊瑚礁ヨリ成レル針ノ如キ巖上ヲ這フ之ヲ過テ後顧スレハ人ヲシテ覺ヘス肌膚震
ヲ生セシム
- 第四十四 仝二
- 第四十五 仝三
- 第四十六 南根村（新命名）海岸ヨリ小紅頭嶼及福井丸ヲ望ム
- 第四十七 椰子林ノ景
- 第四十八 西湯〔原文ママ〕村（新命名）ニテ撮影
- 第四十九 南根村撫蕃品分配後ノ景
- 第五十 佐野村（新命名）ニ於テ蕃婦兒ヲ雇フテ海上ヲ眺ム右方烟波ノ間僅ニ見ユルモノ小
紅頭嶼トナス其左ニ在ル岬ヲ望南角（新命名）ト称ス
- 第五十一 佐野村ノ蕃屋菊地少佐一行舎營セシ処ナリ
- 第五十二 奥本峠（新命名）絶頂ヨリ暴雨中矢代湾（新命名）ヲ望ム
- 第五十三 紅頭嶼南端ノ高山白雲ヲ戴ク
- 第五十四 水田ニ於テ水芋繁殖ノ景
- 第五十五 清水村内ヨリ獅子角ヲ望ム
- 第五十六 三毛山羊放養ノ景
- 第五十七 蕃人群衆中ニ於ケル成田技師
- 第五十八 上陸地海岸ニテ蕃人ノ正面及側面
- 第五十九 仝二
- 第六十 紅頭嶼上陸点全景ノ一
- 第六十一 仝二
- 第六十二 陸軍歩兵少佐従六位勲五等功五級菊地主殿民政局事務官従七位勲六等佐野友三郎

- 第六十三 上陸点海岸ニテ蕃人一行ヲ環視スル景
- 第六十四 紅頭嶼上陸点全景三
- 第六十五 全四
- 第六十六 菊地村（新命名）ニ於テ撫蕃品分配ノ景
- 第六十七 上陸点海岸炊焚場ノ景
- 第六十八 東丘村ヨリ清涼湾ヲ望ム
- 第六十九 蕃婦西湯〔原文ママ〕村ニテ撮影
- 第七十 上陸点海岸探見隊本部幕営
- 第七十一 蕃人ノ舟小屋
- 第七十二 清涼湾海浜パングムス樹林ニ於テ一行休憩ノ景
- 第七十三 菊地村ニテ撫蕃品分配前ノ景
- 第七十四 菊地村々内ノ景
- 第七十五 蕃人家屋ノ屋根
竹及萱ヲ以テ造ル
- 第七十六 菊地村内蕃人集合
- 第七十七 蕃人ノ家屋
櫓仕事場物置
- 第七十八 便乗医師森拳石蕃人ヲ治療スル景
- 第七十九 蕃人家屋
櫓仕事場、物置、穴居ノ本宅
- 第八十 成田技師ト蕃人
- 第八十一 菊地村内ヨリ福井湾（新命名）頭ノ福井丸ヲ望ム
- 第八十二 蕃人舟ヲ海岸ニ曳揚クル景
- 第八十三 蕃人宮内省へ献上スヘキ椰子実ヲ積載シテ西湯〔原文ママ〕村ヨリ菊地村ニ回送到着
ノ景
- 第八十四 蕃人ノ集合
- 第八十五 殖産部標品
蕃人製 蕃舟模形
全 海魚ノ模型二種
一ハ鰹ニシテ他ノ大ナルモノハ不明ナリ
全 蕃人用木笠
全 幣束ノ如キモノ
其頂上ハ人形ノ如ク粗雑ニ彫刻シ飾ルニ鶏ノ羽毛ヲ以テス図中ノ下ニ横ハルモノ

是ナリ祭時等儀式ノ時蕃舟ノ舳ニ拵ミ入レ以テ裝飾ノ用トナス

第八十六 菊地村内菊地指揮官一行舎營蕃人家屋

明治三十年三月十八日大雨盆ヲ覆ヘスカ如ク午後三時半ニ至リ忽然大洪水一行ノ幕営地ヲ襲ハントス菊地指揮官等一行海岸ノ幕営ヲ去リテ村内ニ舎營セリ図ニ在ルモノ即チ是ナリ

第八十七 殖産部標品

蕃人製 舟中ノ水垢取り
全 舟中ノ腰掛 漕舟ノ際腰掛ニ供ス
全 釣道具二種
全 椰子ノ内殻ニテ作りタル水入レ
全 土製瓶
全 畚ノ如キ雜物入レ

火烧嶼土人製釣道具

右方ニ在ルモノ是ナリ用途ハ主トシテ鱻魚釣ニ用ユト云フ

第八十八 殖産部標品

紅頭嶼産 薯榔
土語ツームント称シ縄及釣糸ヲ染ムルニ用フ其色茶褐色トス
全産 椰子実
右方ノ端ニ在ルモノ

第八十九 殖産部標品

紅頭嶼蕃人製 帽子二種
全 土器二種
土器ハ円形ノ土瓶ニシテ之ヲ蔽フモノハ土製ノ鉢ナリ

第九十 殖産部標品

蕃人製 木盃
全 櫂
全 手網
網ハ苧麻ヲ以テ造ル概漁業ニ使用シ時トシテハ物品ヲ受取ルニ用ユルコトアリ

第九十一 殖産部標品

同島産ノ 紅樹
蕃人製 カワハギノ剥製
紅頭嶼産 木枝ニ生スル菱ノ如キ一種ノ黴
左方ニ在ルモノ即チ是ナリ用途ハ蕃舟ノ板ノ透間ヲ塞クニ用フ

全 貝類

第九十二 殖産部標品

紅頭嶼産 水芋

右方ニ在ルモノ

全 長芋

中央ニ水芋ニ接シテ横ハルモノ

全 筍芋

長芋ノ後ニ在ルモノ

全 蕃薯

左方ニ在ルモノ

全 生姜

蕃薯ノ前部及長芋ノ左側ニ在ルモノ

第九十三 殖産部標品

蕃人製 着物二種

全 網袋二個

全 帽子、山刀、及同嶼産ノ豆

着物ノ大ナルモノハ主トシテ雨中ニ用ヒ小ナルモノハ晴天ニ用フ然レトモ此小ナルモノハ苧麻ニテ製スルモノニシテ彼等ノ内稀ニ着用スルヲ見ル大概ハ椰子樹ノ外皮ニテ造リタルモノヲ着ス図中大ナルモノモ亦全種ノ製作トス左方網袋ノ外ニ散在スルモノハ木茸ニシテ蕃人ハ煮テ之ヲ喰フ山刀ハ右肩ヨリ左腋下ニ斜ニ掛ケ非常ニ之ヲ貴重ス実ニ容易ニ得ヘカラサル所ノモノナリ

第九十四 殖産部標品

蕃人製 魚ノ模形

全 着物

主トシテ苧麻ニテ作ル

全 日覆

椰子樹ノ外皮及織緯〔原文ママ〕ニテ作ル蕃婦ノ野外ニ労働スル時日覆ノ為メ背ニ負フモノトス

第九十五 殖産部標品

火焼嶼産 藤

ジャンク繫留ニ用フ

紅頭嶼蕃人製 杵

第九十六 菊地村全景

第九十七 上陸点幕营地全景

第九十八 奥本小隊紅頭嶼引上ノ際撮影

第九十九 民政局員一行及従者

- 民政局通訳生藤本賢次郎
- 土語通訳鄭守徳
- 民政局事務嘱託徳永和充
- 従者
- 台湾新報社特派員寺田勝士
- 民政局属石川豊太郎
- 従者
- 民政局事務嘱託栗村顕三郎
- 従者
- 従者
- 従者
- 民政局技師成田安輝
- 民政局事務嘱託熊谷敬太郎
- 民政局属稲田初太郎
- 民政局事務官佐野友三郎
- 台北測候所長技手近藤久次郎
- 民政局属四倉峰雄
- 民政局属横山虎次
- 台湾通信社特派員長浜実
- 従者
- 民政局技手萱場三郎

以上が、説明書の紅頭嶼にかかわる部分である。説明書からその撮影対象が島全景、海岸、湾、集落、家屋、船、田畑、島民、調査隊幕营地、調査隊一行、殖産部標品などであったことが分かる。さきほどの調査行程と説明書を照合させることで、そのいくつかについて撮影日なども特定することができる。

まず、説明書中の第二十七は、海上から紅頭嶼を撮影しているから、上陸した3月15日か、帰りの途に就いた3月19日のいずれかであろう。第三十四、三十五は清水村（Iranomilek）での「撫蕃品」配布つまり贈与品頒布であるから3月16日、第三十七も東丘村（Ivalino）での贈与品頒布であるから3月16日、第三十八、三十九は東丘村（Ivalino）での景色であるから3月

16日もしくは18日である。第四十～四十五は菊地村（Iraralay）から西陽村（Yayo）に至るまでの行程であるから3月17日である。また、第四十六は南根村（Iratay）であるから3月17日。第四十七は「椰子林の景」としか書かれていないが、椰子林の撮影について、『台湾新報』の記事に西陽村（Yayo）での撮影として次のように記されている。

有田君は命を受けて宮内省に献納せらるべき椰子樹の果実を結べる全景及樹林の景色を撮影し、島人の携へ来れる尤も清浄なる果実百余個を買収し、島人の船を雇ふて之れに搭じ、兵士二名をして護送し幕営に至らしむ¹⁹

これから「第四十七 椰子林の景」は西陽村（Yayo）の椰子林であり、調査行程から撮影したのは3月17日と分かる。このとき兵士2名が幕営のある菊地村（Iraralay）へ船で椰子の実を運んでいるが、有田もこれに同行したようである。それは、「第八十三 蕃人宮内省へ献上スヘキ椰子実ヲ積載シテ西湯〔原文ママ〕村ヨリ菊地村二回送到着ノ景」とあることから分かる。おそらくこの後有田は同船で菊地村（Iraralay）を発ち、西陽村（Yayo）へと引き返したか次の目的地である南根村（Iratay）へと向かったのであろう。第四十八は西陽村（Yayo）であるから3月17日、第四十九は南根村（Iratay）での贈与品頒布であるから3月17日である。第五十、五十一は佐野村（Imorod）であるから3月17日もしくは18日である。第五十二は佐野村（Imorod）から島を横切って東丘村（Ivalino）へ至る途中にある奥本峠であるから3月18日。第五十三の「紅頭嶼南端ノ高山白雲ヲ戴ク」もこのあたりで撮影したものであろうか。第五十五は清水村（Iranomilek）での景色であるから3月16日もしくは18日である。第六十六は菊地村（Iraralay）での贈与品頒布であるから3月16日。第六十八は東丘村（Ivalino）での景色であるから3月16日もしくは18日である。第六十九は西陽村（Yayo）でヤミの女性を撮影したものであるから3月17日である。第七十二は中村（Iwawo）と清水村（Iranomilek）との間の緑陰における小憩であるから3月16日である。第七十三は菊地村（Iraralay）での贈与品頒布であるから3月16日、第八十三は第四十七のところでも述べたとおり3月17日である。そして、第八十六は菊地村（Iraralay）での幕営を大雨のためヤミの家屋に移した後であり、3月18日もしくは19日である。第九十八は紅頭嶼引き上げの情景であるから3月19日である。

このように、調査行程などと照合させることで、説明書記載の写真説明のいくつかについて撮影日を特定することができた。また、これにより説明書の写真が必ずしも調査行程の時系列順に並んでいる訳ではないことが分かった。

ところで、陸軍省に報告された説明書には、写真の説明のみで写真そのものが残されていない

¹⁹「紅頭嶼探險記」、『台湾新報』（1897年4月16日）

いが、防衛省防衛研究所にはもう一つ海軍省への報告書が保管されており、そこに写真およびその説明を見ることができる。「官房第1505号 角田秀松 台湾東部2ヶ所の実査報告に付報告」(1897)²⁰がそれである(以下「報告書」と記す)。報告書記載の写真に関する説明を以下に記す。

紅頭、火烧二嶼寫真目錄

紅頭嶼

- 1 清涼湾頭「パンダマス」樹間探險隊一行ノ休憩
- 2 東丘村ヨリ東清湾ヲ遠望スルノ図
- 3 蕃婦及蕃舎
- 4 福井湾頭菊地村ノ全景(姉妹岩)
- 5 蕃舎ノ家根
- 6 福井湾頭菊地村ノ海濱ニ於テ探險隊ノ一行幕営
- 7 全 全 蕃人及蕃舎
- 8 全 全 西端停止斥候及全村落

火烧嶼

- 9 阿眉村連脈ヨリ中寮澳及其海岸村落ノ遠景
- 10 紅頭嶼福井湾頭菊地村ニ於テ探險隊蕃人へ物品分配
- 11 全 中村ヨリ清水村ニ至ル沿岸
- 12 全 蕃舟及舟小屋
- 13 火烧嶼土人及探險隊一行
- 14 南岬及其燈臺
- 15 紅頭嶼清水村ノ蕃人及蕃舎

上記目録および写真から海軍省に対する報告書に紅頭嶼関係の写真12枚(番号1～8、10～12、15)のあることが分かる。これらの写真12枚は、後述する伊能嘉矩所蔵写真と同一のものが多く、紙幅の都合上、ここに写真を載せることはできないが、この海軍省に対する報告書の写真や説明を、伊能嘉矩所蔵写真や先の陸軍省に対する説明書と照らし合わせることで、3月調査の写真内容がより明らかになると考える。

²⁰「官房第1505号 角田秀松 台湾東部2ヶ所の実査報告に付報告」、『台湾嶋関係書類 卷1 明治28～38』(防衛省防衛研究所)海軍省-台湾-M28-1-17 明治30年3月26日～明治30年4月19日, JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C11081240500, 防衛省防衛研究所所蔵

4. 伊能嘉矩所蔵の写真

遠野市立博物館には、伊能嘉矩所蔵の台湾関係資料が伊能家から寄託され管理されている。資料の中には多くの写真が含まれているが、日本順益台湾原住民研究会によりその一部について解説され『伊能嘉矩収蔵台湾原住民写真集』²¹（1999）としてまとめられ出版されている。これは伊能嘉矩所蔵の貴重な写真を広く世に伝え利用できるようにした労作である。この本の中には紅頭嶼に関する6枚の写真が掲載されている。執筆者による各写真のキャプションには、「蘭嶼島（日本統治期は紅頭嶼という名前）。図版97～102の写真には伊能の説明が一切なかった」とのみ記されている。その画像内容からこれらが1897年の3月調査で有田春香が撮影した写真ではないかと推測され、遠野市立博物館の許可を得て写真の閲覧撮影調査を行った。紅頭嶼に関する写真は『伊能嘉矩収蔵台湾原住民写真集』所蔵の6枚を含む16枚あり、博物館では「紅頭嶼」（写真16枚、B-91）として一式整理されている。薄い紙を中央で折って24.5×17cmの長方形とし、折り重なった上の紙の中央部を写真の大きさ（14×10cm）に切り取り、そこに写真がはめ込まれたように貼り付けられている。もともと和綴じにされていたのを、綴じ糸を解いてばらばらにしたものらしく、紙の長辺側の縁には4つの綴じ穴が開けられている。博物館では「紅頭嶼」として一式整理されているが、調査行程で撮影された台湾本島や火烧島の写真なども含まれているようである。伊能による番号や説明などは一切ついていない。

ここでは16枚の写真の内、明らかに紅頭嶼の写真と分かる12枚（写真1～12）について一枚ずつ見ていきたい。伊能所蔵の写真は、海軍省に提出された写真と同一のものが多いことから、3月調査で撮影された写真であることは明らかである。また、陸軍省に提出された説明書には、写真の実物が残っていないため、伊能所蔵の写真と実物をもって照合することはできないが、本調査が陸軍部7名、海軍部4名、民政局19名、便乗者14名、軍隊16名をはじめとする同一の調査隊によるものであり、説明書自体が、台湾総督府から陸軍省に写真とともに送られたものであることから、類似するものが多いと予想される。ここでは、伊能所蔵の写真と海軍省に提出された報告書中の写真および説明とを照合させつつ、説明書の説明に類似するものがあるかも見ていき、写真の内容について明らかにしたい。

写真1は、報告書中「6 福井湾頭菊地村ノ海濱ニ於テ探險隊ノ一行幕営」の写真と同一のものであり、説明書中「第七十 上陸点海岸探見隊本部幕営」の説明と類似する。3月15日にIraralay海岸に上陸し、幕営と調査隊の一部を撮影したものである。『台湾新報』の記事には幕営について次のように記されている。

上陸点なる砂漠に幕営するに決し軍隊は○○○に○○し○○にして二棟の幕営を建設し一

²¹ 日本順益台湾原住民研究会、『伊能嘉矩所蔵台湾原住民写真集』（順益台湾原住民博物館，1999）
執筆：江田明彦，クリスチャン・ダニエルス，小林岳二，末成道男 中国語訳：許進發，陳文玲

は本部に宛て一は民政局員の一行之れに入る²²（○は文字が不鮮明のため判読できず）

写真に写っている二棟がその幕営であろう。幕営前に立っている人々の中で、左のひときわ背の高い、白っぽい服を着ている人物がデビッドソンである。ちなみにこの写真は、『台湾名所写真帖』（1899）²³にも掲載されており、そこには、「紅頭嶼探見隊上陸地」とキャプションが付されている。なお、デビッドソンについては、陳俊宏の『禮密臣細説台灣民主國』（2003）に1900年前後に撮影された顔写真が掲載されており、本稿では顔の照合にこれを使用している。

写真2は、Iraralayの海岸である。ヤミ独特の彫刻の施された船と船小屋が見える。説明書中「第二十九 蕃船、小屋」の説明と類似する。

写真3は、報告書中「10 紅頭嶼福井湾頭菊地村ニ於テ探險隊蕃人へ物品分配」の写真と同一のものであり、Iraralayの海岸で撮影されたものである。説明書中「第七十三 菊地村ニテ撫蕃品分配前ノ景」の説明と類似する。調査中、言語が通じないながら、各集落でヤミの人に対し、領有の告示・諭告、国旗授与、贈与品頒布が行われた。3月16日に撮影されたものである。調査員たちは座っているヤミの人々に対面して立っている。一行の指揮監督をした菊池主殿（歩兵少佐）であろうか、中央で国旗を巻いたような棒状のものを持っている人物の姿も見える。

写真4は、Iraralayの写真である。報告書中「4 福井湾頭菊地村ノ全景（姉妹岩）」の写真と同一のものであり、説明書中「第九十六 菊地村全景」の説明と類似する。



写真1

（出典：伊能嘉矩所蔵写真 遠野市立博物館管理の伊能家寄託資料）



写真2

（出典：伊能嘉矩所蔵写真 遠野市立博物館管理の伊能家寄託資料）

²² 「紅頭嶼探險記」、『台湾新報』（1897年4月8日）

²³ 石川源一郎、『台湾名所写真帖』（台湾商報社、1899）

写真5は、報告書中「8 全 全 西端停止斥候及全村落」と同一の写真であり、Iraralayで撮影されたものである。左の主屋屋根の向こうに上半身だけ写っている白っぽい服を着た人物は、デビッドソンである。

写真6は、報告書中「7 全 全 蕃人及蕃舎」の写真と同一のものであり、Iraralayで撮影されたものである。中央に写っている日本人は、他の写真にも写っている人物だが、誰かは不明である。

写真7は、報告書中「1 清涼湾頭「パンダマス」樹間探険隊一行ノ休憩」の写真と同一のものであり、説明書中「第七十二 清涼湾海浜パンダマス樹林ニ於テ一行休憩ノ景」の説明と類似する。3月16日にIwawoからIranomilekに到るまでのあいだに休憩したときの写真である。



写真3
(出典：同上)



写真4
(出典：同上)



写真5
(出典：同上)



写真6
(出典：同上)

写真8は、主屋vahayの屋根を撮影したものである。報告書中「5 蕃舎ノ家根」の写真と同一のものであり、説明書中「第七十五 蕃人家屋ノ屋根 竹及茅ヲ以テ造ル」の説明と類似する。

写真9は、報告書中「15 紅頭嶼清水村ノ蕃人及蕃舎」の写真と同一のものであり、Iranomilekの副屋makarang前に集合したヤミの人を撮影したものである。銀貨などと交換するためであろうか、さとうきびを持つ人、船の模型を前に椰子の実のようなものを持つ人の姿も見える。

写真10は、報告書中「2 東丘村ヨリ東清湾ヲ遠望スルノ図」の写真と同一のものであり、Ivalinoで3月16日もしくは18日に撮影されたものである。説明書中「第三十八 全村蕃人家屋ノ景」もしくは「第三十九 全村ノ全景遠望」の説明と類似する。この写真は、『台湾名所写真帖』（1899）にも掲載されており、そこには、「紅頭嶼土人家屋」とキャプションがある。『台湾名

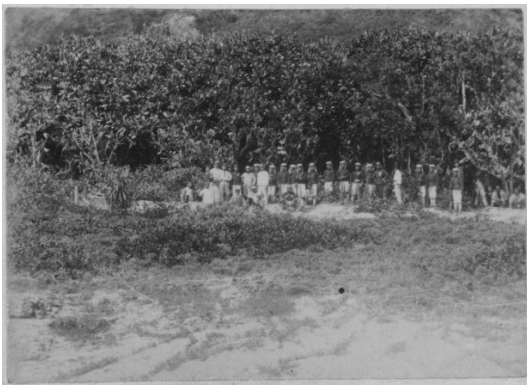


写真7
(出典：同上)



写真8
(出典：同上)



写真9
(出典：同上)



写真10
(出典：同上)

所写真帖』には紅頭嶼の写真として写真1と写真10のほかにもう1枚「紅頭嶼村落」とキャプションのあるImorod全景写真が掲載されている。伊能所蔵写真には含まれていないものだが、これも3月調査で撮影されたものの可能性がある。

写真11は、副屋前でヤミの女性2名を撮影したものである。報告書中「3 蕃婦及蕃舎」の写真と同一のものであり、説明書中「第六十九 蕃婦西湯〔原文ママ〕村ニテ撮影」の説明と類似する。調査行程から3月17日にYayoで撮影されたものである。Yayoでのヤミの女性との対面については、『台湾新報』の記事に次のように記されている。

西陽村（命名）の西端に達す島民は果物、或は什器を携へ来りて我れに鬻がんとするもの
其他の情体は既記の如くなれば敢て贅言を弄するを省く而して茲に特筆大書すべきものは
老幼婦女の我が一行を迎ふるものありしことにして一行が着島以来未だ嘗て之れ等の風俗
を見ず²⁴

ちなみに、調査隊上陸後、一部の男性を残し、女性や子どもたちの多くは集落背後の山の方に逃げたため、女性を撮影することは難しかったようである。先にも引用した記事だが、『台湾新報』に3月16日Iranomilekでのことが記されているので再掲する。

村内の老婦女子は一行の入村を聞知し既に山中に逃れて一人として出で来るものなし佐野
君曰く老幼婦女子の風俗を見んと欲せしに今斯如し井原君亦落胆やる方なき面相にて謂へ
らく我れ亦婦女子の風俗を撮影せんと欲すること久し今日之れを写さざれば亦時期を得難
しとて相見て哄然²⁵

写真12は、調査に参加した主要人物を撮影した記念写真。『台湾新報』の記事に3月19日にこのような写真を撮影したことが次のように記されている。

指揮官及び佐野事務官を始め民政局員の一行紀念の爲め上陸点の西部濶業樹の緑森々たる
樹陰の好位置をトし、有田君の技術に依て撮影せられね。余又之れに加はる²⁶

おそらく、この時の一枚であろう。最前列に坐っている左から3番目の人物がジェームズ・W・デビッドソン。前から2列目の左から2番目の人物が民政局事務官の佐野友三郎、同列左から

²⁴ 「紅頭嶼探險記」、『台湾新報』（1897年4月15日）

²⁵ 「紅頭嶼探險記」、『台湾新報』（1897年4月14日）

²⁶ 「紅頭嶼探險記」、『台湾新報』（1897年4月21日）

4 番目の背広にネクタイの人物が技師の成田安輝である。佐野友三郎は、この調査で各調査を統率する立場にあった。佐野は、後に山口県立図書館長となり、アメリカの図書館事情や自らのアイデアをもとにした多くの先進的試みを行い、日本における公共図書館の礎を築いた人物として知られている。なお、佐野については、石井敦の『佐野友三郎』（1981）²⁷に顔写真が掲載されており、本稿ではこれを照合に用いている。成田安輝は、アメリカでの鉱業、土木事業などの事業経営を経験している人物で、1896年に台湾総督府撫墾署主事及び技師に任じられて拓殖事務に当たっていた。成田は3月調査の後、同年5月にも紅頭嶼の再調査を行っていたことが、皆川によって指摘されている²⁸。これについては、『台湾新報』1897（明治30）年5月12日付けの「紅頭嶼の再探險」という記事に、次のように書かれている。

民政局にては殖産部技師成田安輝技手児玉鐵太郎県治課勤務石井信警務課勤務雨森橘次の四氏を派し江頭嶼の再探險を成す筈にて明十三日基隆出港の江の島丸に搭して其行に上る筈にて嘗て榎本前農商務大臣の斡旋に由り同嶼探險の出願を成し第一着に其許可を受け曩きに探險の際にも一行に従ひたる上田毅門氏の一行も亦便乗して親しく同嶼の将来に於ける拓殖上の監査を成すと云ふ

5月調査には、成田のほか、児玉鐵太郎（技手）、石井信（県治課）、雨森橘次（警務課）、上田毅門（民間人）らの一行が参加していた。また、この調査行には動物学者の多田綱輔も便乗して参加している。多田の報告書によれば、この調査は1897年5月17日～28日にかけて行わ



写真11
（出典：同上）



写真12
（出典：同上）

²⁷ 石井敦、『佐野友三郎』（日本図書館協会、1981）

²⁸ 皆川隆一、「鳥居龍蔵撮影＜海辺の景＞の疑問 紅頭嶼古写真調査ノート（1）」、『台湾原住民研究』14（2010）：53-54

れたようである²⁹。成田はその後、外務省から密命を受け、中国へ渡って重慶に滞在しチベット入りする準備を進め、1901年12月、河口慧海に次いで日本人として2人目のラサ入りを果たしている。成田については、江本嘉伸の『西藏漂泊（上）』（1993）³⁰に顔写真が掲載されており、本稿ではこれを照合に用いている。軍務局の指揮官として参加した菊池主殿については、他資料に顔を確認できるものがないため、断定はできないが、佐野と成田の間に立っている多くの勲章を付けた人物が菊池と考えられる。この人物は写真1や写真3でも中心に写っている。

以上が、伊能嘉矩所蔵の紅頭嶼関連写真である。何枚かの写真にデビッドソン、佐野、成田が写っていること、海軍省に提出された報告書の写真と同一のものがあることから、伊能所蔵の写真が1897年3月調査の写真であることは間違いない。また、デビッドソンが写っていること、撮影技術の高さ、説明書や報告書との照合などから、これらの写真を撮影したのは民政局が雇った写真師、有田春香といつてよいであろう。ちなみに、これらの写真を所蔵していた伊能は3月調査には参加していないが、同じ年に台湾全域調査を行っており、11月22日に紅頭嶼を訪れている。午後2時に上陸し、すでに調査をしていた鳥居龍蔵らの出迎えを受け、その日の夜半に紅頭嶼を離れている³¹。伊能は総督府民政局雇員としてさまざまな文書を作成し、多くの調査を行っている。伊能所蔵の紅頭嶼写真は民政局でなんらかのかたちで入手した3月調査報告書類の一部だったのであろう。

5. 結

1897年3月調査では、有田春香、ジェームズ・W・デビッドソン、井原の3人の人物が写真撮影していた。その中でも民政局雇用の写真師として主要な役割を果たしていたのが有田春香であった。本稿では有田の紅頭嶼調査写真の一部について、陸軍省に提出された写真説明書や海軍省に提出された報告書、『台湾新報』記事、伊能嘉矩所蔵の写真などからその内容を明らかにした。

なお、有田撮影の写真は、調査後の報告書以外にも使用されている。1897年3月30日付の『台湾新報』に「写真頒付」という次の記事が掲載されている。

先頃紅頭嶼火焼島探險の爲め出發せし一行に於て、該地の情況を撮影せし写真は今般希望者に頒付せらるることとなりたるが該写真は凡百四五拾枚を一冊とし、此代価は拾円内

²⁹ 多田綱輔、「紅頭嶼探検記」『動物学雑誌』105号（1897）：266-272

多田綱輔、「紅頭嶼探検記（承前）」『動物学雑誌』106号（1897）：313-319

³⁰ 江本嘉伸、『西藏漂泊（上）』（山と溪谷社、1993）

³¹ 伊能嘉矩（森口雄稔編著）、『伊能嘉矩の台湾踏査日記』（南天書局、1992）：132-134

外の見込みなりと³²

調査で撮影された「大凡百四五拾枚」の写真を一冊の写真帖にまとめ、「拾円内外」で希望者に頒付するという。問いあわせが多かったのか、3月31日付同紙には「写真頒布再記」という次の記事が出る。

紅頭嶼探検隊の一行中、総督府民政局にて特に有田某を雇ひ入れて随行せしめ、火焼島、紅頭嶼の二島中能く文筆の尽くす能はざるあらゆる風俗、景色は図解を以て補綴報告するの目的にて撮影したるものにて、前号頒布と記せしは一行の希望者に頒つの意味には非らずして、各官衙に頒布するものならん。亦同写真は其数百枚にして最上等の出来なりと云ふ³³

頒布するのは調査隊一行の希望者に対してでなく、各官衙に対してであるという。ここでは写真の枚数は「百枚」となっている。そして、7月9日には「写真天覧に入る」という次の記事が出る。

去る三月以来夫の総督府軍務局陸軍部菊池歩兵少佐一行探險の際、紅頭嶼及火焼島等の実景を撮れる百余枚の写真帖を過日陸軍省の御用を帶び渡台せる本郷少佐帰郷の節携え帰り、数日前陸軍大臣より宮内大臣を経て天覧に供し奉れりとぞ³⁴

写真帖は、希望する各官衙に頒布されただけでなく、陸軍大臣から宮内大臣をへて明治天皇に献上されたのである。梶田明宏は宮内庁書陵部が所蔵している明治・大正期の台湾関係写真帖について詳細にまとめている³⁵。そこでは明治天皇が台湾の状況についてなみなみならぬ関心を抱いていたこと、そのとき写真が台湾の状況を説明し理解してもらうための有力な手段であったことが具体的に明らかにされている。3月調査の写真帖が宮内庁書陵部で見つかれば、有田撮影写真の全貌が分かるはずであるが、残念ながらいまだ発見されていない。今後の発見が待たれるところである。

³² 「写真頒布」『台湾新報』（1897年3月30日）

³³ 「写真頒布再記」、『台湾新報』（1897年3月31日）

³⁴ 「写真天覧に入る」、『台湾新報』（1897年7月9日）

³⁵ 梶田明宏、「書陵部所蔵明治大正期台湾関係写真帖について」、『書陵部紀要』第62号（2011）：53-75

謝辞

伊能家寄託資料である伊能嘉矩所蔵写真の閲覧調査、使用を許可してくださった遠野市立博物館に感謝の意を表したい。本稿は、2013年第6回台日原住民族研究フォーラムにおいて口頭発表したものに新資料による考察を加え、大幅に加筆したものである。